「唯一のまことの神」　　**ヨハネ３：１７**

導入

みなさんは、映画はお好きでしょうか？今は、わざわざ映画館に行かなくてもいろいろな動画配信サービスで、いつでも映画を観ることができますが、お休みの日に映画館に出かけて、大きなスクリーンで映画を観るのもいいですよね。今、世の中には、映画だけではなく、漫画や小説など、さまざまな形式で、実にたくさんのお話し・物語りに溢れています。日々、新しいストーリが生み出されては、消費されています。面白いのは、そうやって次々に生み出されていく作品には、その時代に生きている人々の思いが反映されているということです。明治学院大学などで教えておられる高橋優子さんという方が書かれた「ポップカルチャーを哲学する」という本では、現代の日本の映画や小説、漫画、アニメなどにおける、キリスト教的の影響について考察しておられました。ユダヤ・キリスト教的なモチーフは人気が高く、そして実際に人々にウケるそうです。確かにキリスト教的なモチーフがちりばめられた作品はたくさん思い浮かべることができます。しかし、この時代に生きるクリスチャンとして見たときに思うのは、それらの作品に登場する神やキリスト教的なものは、私たちが信じているものとは違うということです。

今日の説教題は「唯一のまことの神」としました。お読みいただいたヨハネ 17 章 3 節の御言葉から、「永遠のいのち」でも、「イエス・キリスト」でもなく、「唯一のまことの神」としましたのは、今、この現代の日本において「神」を知るということがとても大切なことだと感じたからです。科学的で、客観的なことが正しいとされ、合理的に説明できないものは信じられないとされているこの世の中で、「唯一のまことの神」が確かにおられるということ、そしてこの「唯一のまことの神」とともに歩むときに与えられる豊かな祝福について、ぜひ知っていただきたい。そのような思いで、準備をしてまいりました。

永遠のいのちとは

さて、今日、選んだ聖書の御言葉は、ヨハネによる福音書の 17 章 3 節です。このみことばは、イエス様が天を見上げて神様に向かって祈られた祈りの言葉であり、「大祭司の祈り」とも言われているものです。大祭司というのは、私たち日本人にはあまり馴染みがないものですね。平たく言うと、神と人との間に立つ存在です。

ここでイエス様は、永遠のいのちの定義について語っておられます。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

神やイエス・キリストを「知ること」が、なぜ「永遠のいのち」と関係してくるのでしょうか。イエス様が言われたこの言葉の意味は、どういうことでしょうか。「永遠のいのち」と言われて、私たちがまず思い浮かべるのは、いつまでも生きていられるということ＝死なないということではないかと思いますが、しかしそう考えてしまうと、このことばの意味はよく分からなくなってしまいます。

人は、この肉体的な身体だけで生きている存在ではありません。心を持ち、意志をもつ、精神的な側面も併せ持ったトータルな存在であり、人格的な存在です。私たちの「いのち」は決して肉体的なものにとどまらないものです。魂や霊といわれるような精神性、人格性も「いのち」を考える上ではとても重要な要素です。ここで言われているいのちはそういう全人格的ないのち、もっと簡単に言うなら、私という存在そのもの、私たちのすべて、そいう次元の「いのち」のことです。

私たち人間は、誰しも、いつかこの地上の生涯を終えて、死を迎える時がやってきます。今与えられているこの肉の身体は、一度、その役目を終える時がやってくるのです。しかし、聖書の中でイエス様は、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」（ヨハネ１１：２５）ともお語りなられました。永遠のいのちは、イエス・キリストを信じる者に与えられる新しいいのちであり、神様が与えてくださるものです。時間を超越した永遠の存在である神様を抜きにして、永遠のい

のちを考えることはできません。それが聖書が教えていることです。

唯一のまことの神を知る・・・

今朝の御言葉にもどりましょう。永遠のいのちについて、先ずイエス様が挙げられたのは、「唯一のまことの神を知る」ということでした。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたを知ること」である。そう、イエス様は言われています。

人は意識しているにしろ、無意識であるにしろ、神を求めている存在です。数学者・哲学者としても有名なパスカルは、「人間の心にはどんなものも埋めることのできない大きな空洞がある。それを埋めることができるのは神だけだ。」という言葉を残しています。またアウグスティヌスという人は、「人間は神に向かうように造られた存在であって、私たちの心は、神のうちに憩うまでは、安らぎを得ることができない」と言いました。この科学万能の時代に、何を言っているのだと思われるかもしれません。しかし、はたしてこれらの言葉は聞くに値しないような迷信なのでしょうか。

そんなことはないと、私は思います。色々な映画、小説、漫画、アニメなどを観ていると、なにかしら、この世界を超越する神のような存在が描かれていることが多いように感じます。「でも、それは漫画や小説のような『お話し』の中のことでしょ」と言われるかもしれません。しかし、人々が何の関心も持っていないのであれば、わざわざそのような描写がされることはないと思うのです。世の中の人々も、すべてのことが科学的かつ理性的に説明されるとは考えいるわけではなく、説明できないことがあると感じています。

パスカルやアウグスティヌスは、このことを、人間はどこかで神を求めている存在であるのだと説明しました。そして、彼らの言葉には、私たち人間が直面している一つの悲惨な現実も表現されています。それは、人間は神を求める存在であるのに、「唯一のまことの神」を知らないということです。この悲劇の原因には、人が持っている「罪」があります。聖書が言う「罪」とは、神から離れ、神を無視し、自分勝手に生きることですが、更に大胆に一言でまとめるなら、「神の愛」を拒むことであると言えると私は思っています。本来、神にしか埋められない心の空洞を、神ではないもので補おうとし、その結果、ある人は「お金」を、またある人は「権力や力」を、自分の神としてしまうということが起こります。

みなさん、聖書が教える「唯一のまことの神」は、愛の神です。神は、私たち一人一人のことを愛し、かけがえのない存在として大切にしてくださっています。しかし、神を知らない生まれながらの人間は、この神の愛が分からなくなっているのです。「神が愛なら、なぜ？　神が、私を愛していてくださるなら、なぜ？」今、将に、苦しみや困難の中におられる方は、そう思われたかもしれません。また、私のような者は神に愛される資格はないのだと、ずっと自分を責め続けて来られた方がいるかもしれません。私たちはみな誰しも心の中に、人には言えない暗い部分を抱えています。そんな私たち人間には、神はただ厳しい審判者、審き主に見えることもあるでしょう。神が自分を愛しているだなんて信じられない。その思いもよく分かります。私たちクリスチャンも、もし自分を見るならば、神に愛される資格がない罪人でしかありません。しかし、聖書は「神は愛である」と、「神はあなたを愛している」と繰り返し、繰返し語り掛けています。私たちは罪のゆえに神の愛が分からなくなっています。それは、神の愛の広さ深さも分からなくなっているということでもあります。私たちの考える小さな「愛」で、神様の愛を推し量らないでください。今朝、みなさんには、神の愛を知らないままでいて欲しくはありません。あなたに注がれている神様の愛の眼差しと、差し伸ばされている神の愛の手に気づかず、無視し続けて欲しくはないのです。神の愛を知らずに生きているとき、神の愛を知ろうとしないでいるとき、私たちは、命の源である「神」がおられるのに、その神から遠く離れて生きているようなものです。「神から遠くはなれているということ」それを聖書は「死」であると教えています。「神の愛」を無視し続けるならば、その行きつくところ

は「死」であり「滅び」です。これは、ちょうど今朝の御言葉の裏返しです。神の愛を知らず、神が愛のお方であることを知らないでいるなら、そこに「永遠のいのち」はなく、ただ「死」と「滅び」があるのです。

イエス・キリストを知る

神を求めているのに、神を知ることができない。人間が置かれている状況がもしそうであるならば、私たちはどうすればよいのでしょうか。ここで重要となってくるのが、次に挙げられている「イエス・キリストを知ること」です。今一度、御言葉を確認してみましょう。「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

イエス様は、ご自分のことを「あなたが遣わされたイエス・キリスト」と言っておられます。つまり、自分は神から遣わされた者であるのだと言っているのです。しかもこの前後の発言からすると、イエス様はもともと神の元におられ、そして神の元から使わされたのだと主張されているのです。たとえば少し後の 5 節には、「父よ、今、あなた御自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。」とあります。世界が始まる前から神とともにおられ、そして神と一緒に栄光を持っていたのです。聖書は、イエス・キリストは、人となられた神であると教えています。このことを、イエス・キリストは「神の子」であると表現してきました。神の御子イエス・キリストは、人の姿を取って、この地上にこられ、そして私たちと同じ人として生きられました。輝かしい栄光の姿を捨てて、私たちのところに来てくださったのです。

何のためにでしょうか。イエス様は何のためにそんなことをなされたのでしょうか。それはあなたのためです、あなたを救うためだ、と聖書は言います。神の元から迷い出、神から離れて闇の中にいる私たち、いのちの源である御方から遠く離れて死の淵にいる私たちを、再び神の元に招き、神の御元に集めるためです。神について、また神の愛について分からなくなっている私たち人間が、正しく神を知ることができるようになるために、私たちが神の愛を知ることができるように、イエス・キリストはこの世に来られました。それが私たちが信じているイエス・キリストです。

昔、こんな話を聞いたことがあります。ある場所に巨大な高層ビルが建ちました。それまで、その場所には鳥たちが飛び交う、空の通り道がありました。高層ビルはとてもきれいなガラス張りです。人間はとてもおしゃれな透明なガラスのビルですが、鳥たちにはそんなことは分かりません。いつものように勢いよく飛んできた鳥たちが、激突し死んでしまうことが頻繁に起きていました。そんな鳥たちを見てかわいそうに思った少年が、こんなことを言いました。「僕が鳥になって、ここにはガラスがあるから危ないよって、教えてあげられたら、鳥たちは死ななくてもよくなるのに。」

まさにこの少年が語ったようなことを、私たちのためにしてくださったのが、イエス・キリストです。神が分からず、神の愛を知らずに生きていた私たちのところに、神はあなたを愛しておられると教えるために、神の御子であるお方が人となって来てくださったのです。主イエスは大きな犠牲を払って、私たちのところに来てくださいました。聖書を読むと、イエス様はハッキリと、ご自分のいのちを与えるために（マルコ１０：４５）来られたのだと語っておられます。自らのいのちを私たちのために差し出し、命がけで私たちへの神の愛を示してくれたということです。

イエス様はこの後、今日の御言葉を語られた後、十字架にかけられて死なれました。十字架は当時のローマ帝国で行われていた死刑のひとつです。イエス・キリストは、何一つ悪いことはしていませんでしたが、犯罪者として十字架刑に処されて、壮絶な死をとげられました。聖書には、十字架上でイエス様が語られた 7 つの言葉がのこされています。その一つは、「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです」（ルカ：２３：３４）という言葉です。無実であったイエス様

を十字架につけた人々に対して神に赦しを求めたイエスさまのことばです。しかしそれは、神の愛を無視し続けてきた私たちの罪についても当て嵌まることばなのではないでしょうか。

聖書は、まさに、キリストが十字架で死なれたのは、すべての人の罪を背負って死ぬためであり、それによって神様との和解の道を開くためであると教えています。そして、イエス・キリストが神から遣わされた救い主であると信じる者、キリストの十字架の死が自分の為であったと信じる者には、罪の赦しが与えられ、神が永遠のいのちを与えると約束されたと、教えています。さらに、みこころに従っていのちを捧げ、私たちへの愛を示されたイエス様を、神様は三日後に甦らされました。死から復活されたイエス様は、その後弟子たちのいる前で天に引き上げられ、今も天で私たちのために祈っていてくださいると、聖書は教えています。主イエス・キリストの復活は、死では終わらない道を神が用意してくださったことの確かなしるしであり、私たちがキリストにあって与る「永遠のいのち」の希望となっています。

私たちは、イエス・キリストを通して、神が愛のお方であり、私たちの思いを超える不思議な御業をなされる、唯一のまことの神であることを知ります。また、キリストを通してでなければ、唯一のまことの神を知ることはできません。

神とともに生きる幸い

みなさん。今日はたった 1 節という短い箇所でしたが、この御言葉から神様の愛について知っていただきたいと願いつつ語ってきました。神が私たちのことを愛してくださっている、先ずいつでも、それが私たちが立ち戻るべきポイントであり、再び歩きはじめる出発点です。

人は神の愛なしには、生きることができません。そして、私たちは、主イエス・キリストを通して、神の愛を知り、その豊かさに与るのです。キリストを信じる者には、さらに豊かに神様のことを知るために、聖霊が与えられ、聖霊によってますます神様について知ることができるようになると、約束されています。私たちはもはや、神がいない「死」の世界を生きるのではなく、唯一のまことの神であるお方とともに生きる、神がおられる「いのち」の世界に生きることができるのです。永遠のいのちに生きる者とされるのです。地上の生涯においては、なお、困難や苦しみがあるかもしれません。しかし、唯一のまことの神がおられ、その方が私たちに愛を注いでくださっていることを知るなら、世界を見る目は変わり、生き方が変わります。

みなさんは「いのち」にたいしてどのようなイメージを持っておられるでしょうか、「いのち」のあるべき姿とはどういうものでしょうか。

いのちには常に新しさがあります。活き活きと活気づいている生命は、絶えず更新され、古くなることがありません。本当に生きているいのちはフレッシュで、瑞々しさにあふれています。また、いのちのあるべき姿は、満たされていることです。心も身体も満たされているときにこそ、私たちは本当のいのちのすばらしさを味わっていると言えます。そして、いのちには光があります。どんな命も尊い輝きを持っています。いのちのあるべき姿は暗闇や不安ではなく、喜びや平安や希望です。

そのような「いのち」に私たちは生きることができているでしょうか。もしもイエス・キリストを知ることがなく、神も神の愛も知らなければ、私たちはそのような「いのち」に生きることはできないでしょう。しかし神とともに歩むとき、私たちは、キリストにあって日々新しくされ、神の愛がわたしたちの心を満たすのです。聖書の御言葉が私たちの心を照らし、キリストにある希望の光が私たちの心の内で輝き始めます。神と共に生きる者に与えられる「永遠のいのち」の確かな約束は、多くの人が恐れる「死」の恐怖からでさえ、私たちを守ってくれます。たとえどんなものも、神の愛から私たちを離すことはできません。

「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知る

ことです。」主イエスは私たちがこの「永遠のいのち」に生きることを願っておられます。

　どうか、今朝、この主イエス・キリストの言葉に耳を傾けてくださったみなさん、お一人お一人が、「唯一のまことの神様」の愛を知ることができますように。そして、神様が与えてくださる「永遠のいのち」の豊かさに生きること出来ますように。お祈りいたしましょう。